Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

《複数性》と《連帯》のポリティクス

上野, 成利

(Citation)
社会思想史研究,21:136-137

(Issue Date)
1997-09-30

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001168

インフォーマル・セッション

《複数性》と《連帯》のポリティクス

（世話人）上野　成利

「文化」なるものを本質主義的に想定したうえで複数の「文化」の共存をうたう多元主義的な立場が、ある特定の集合的アイデンティティへと主体を動員することを要請する、偏狭なアイデンティティ・ポリティクスの陥穽を免れるものではないことは、改めて指摘するまでもないだろう。そのかぎりにおいてわれわれは、何よりもまず、単一のアイデンティティへと秩序化されないような自己のありかたを模索しなければならないといえる。では、自らの内部で複数の自己が抗争するような主体のありかたは、どのような他者との《連帯》を可能にするのか。本セッションのいささか座りの悪いタイトルはこの問いに由来する。こうして本セッションは、斎藤純一氏（横浜国立大）と田崎英明氏（中央大）に問題提起をしていただいたうえで、狭隘なアイデンティティ・ポリティクスを超えうるような政治・社会理論の方向をめぐって討議することをめざしたのだった。

「現われの政治――アーレントとフーコー」と題した斎藤氏の報告は、この問題を考える手がかりをアーレントとフーコーの思想のうちに求めようとする。斎藤氏によれば、両者はともに、一義的な自己、垂直的な位階秩序をもつ自己を「仮想のアイデンティティ」として斥け、むしろ複数の自己、複数の「アイデンティティ」の間で抗争があると考えている。そのうえで、「何者か」(what) の同定が貫徹するにつれ、「誰か」(who) として互いに「現われる」(appear) 政治的空間が狭められてゆく事態、これが彼女らによって問題化されたのである。こうした事態に抗すべくアーレントらは、「熟慮」をつうじて自らの生に一定の方向づけを与えつつ「現われの空間」に参入することを要請する。なるほど、このように「自己への配慮」にもとづきつつ自らの生に特定の様式を与える「存在の美学」は、それ自体としてはあくまでも自己の倫理であって、他者との連帯への問いに直結するものではないだろう。だが斎藤氏によれば、そうした「存在の美学」にも《連帯》を望見するまなざしを認めることができるという。自己倫理の涵養をつうじて集合的アイデンティティから距離をとる人々は、中心から逸れる「範例」(example) を他者に呈示しつつ、他者自身による「存在の美学」の探求を触発するだろうからである。こうして、アーレントとフーコーが要請する「存在の美学」には、複数の真理の間で自由な言論が交わされる「現われの空間」のなかで「他者」の声に出会うことが含意されている、と斎藤氏は指摘する。

一方、「声をめぐって」と題された田崎氏の報告は、まさにそうした「他者」の「声」に出会うことの可能性の条件を問おうとする。田崎氏によれば、アーレントは必然性に縛られた動物的な生としてのゾーエー（zoe）から人間的な生としてのビオス（bios）を区別しつつ、ビオスをゾーエーよりも卓越した生のありかたとみなした。それゆえアーレントの場合、他者によって理解されうる「言葉」（logos）を共有する人間の《複数性》が政治的共同体の条件とみなされる一方、快苦の存在を指し示すだけの「声」（phone）しかもたない者は共同体から排除されることになる。他者に聞き取られない孤独な「声」は公的空間のなかにあっては居場所をもたない、というわけである。だが、にもかかわらず「声」は共同体の内部に忽然と介入してくるだろう。そうしたいわば出来事として到来してくる「声」にたいして、「何者か」とは問わずに「誰か」と問うことが必要ではないのか、と田崎氏はいう。「声」を叫ぶ者と「言葉」を語る者との間の《連帯》こそ、われわれの課題だというのである。

この田崎氏の問題提起を受けて斎藤氏は、他者の「声」を「現われ」させないで表象＝代理してしまう「言葉」の暴力性を問題化することはたしかに必要であり、その意味でも、公的空間／私的空間の二分法には収まらない「現われの政治」という視座のもつ可能性に目を向けたかったのだ、と答えた。だが、「言語」が沈黙し苦痛の「声」が立ち現われる場面に定位しながらビオス／ゾーエーの二分法を越える方向で《連帯》を考えるべきという田崎氏の見解にたいして、斎藤氏はむしろゾーエーとビオスそれぞれの次元で同時並行的に《連帯》を考える必要性を強調しており、両者の立場が完全に一致していたとはいえない（斎藤氏からすれば田崎氏の議論はゾーエーに引き寄せられすぎていることになろう）。これはまたこの両者の間での対立にとどまらない根源的な問題でもある。たとえば、「声」を受けとめようとした瞬間にわれわれはそれを記述するメタ・レヴェルを措定せざるをえないのではないかという中山智香子氏（熊本大）の発言は、田崎氏の掲げる課題の困難さを指摘したものだったし、逆に、近代の公共空間のなかで「女性」が排除されてきた問題に「現われの政治」はどう答えうるのかと問い質した鵜飼哲氏（一橋大）の発言は、ビオスの場面で《連帯》を語ることの困難さを指摘したものだったといえる。その意味では、川本隆史氏（跡見女子大）の発言で強調されていたように、むしろわれわれはいやおうなく《連帯》させられてしまっているという地点から問いを立て直すべきなのかもしれないが、しかしそうだとしても《連帯》をめぐる問いそのものが解消するわけでもないだろう。セッション当日は時間の制約もあって残念ながら議論を十分に詰めるまでには到らなかったが、しかし四〇名近い多くの参加者によって問題の場が共有されたことの意味はけっして小さくはあるまい。来年度以降も何らかの形で議論の継続と発展を図りたいと考えている。